

社説の文体

ーデアル体からダ体へー¹⁾

大野 早苗

1. はじめに

現代日本語の書き言葉の文体²⁾は、文末形式からデス・マス体、ダ体、デアル体に分けられる。言うまでもなく、これらの文体は明治の言文一致運動によって確立されたものであるが、現在では、一般に以下のように使い分けるとされている(日本語教育学会編(2005)、佐竹(1988)等参照)。

- ・デス・マス体：童話や小学校教科書、手紙、器具の取扱説明書等、身近な話題で読み手を意識して語りかけるように述べる文章
- ・ダ体：新聞や雑誌の記事等特定の読み手を意識しない文章
- ・デアル体：社説、論文、事務文書等公的な性格の強い文章

使い分けに関するこうした規範は広く受け入れられているようで、議論されることも少ないが、果たして実態はどうだろうか。昨今の文体についての研究に、野田(1998)、メイナード(2004)等があるが、これらはいずれも一つの文章の中で丁寧体と普通体の混用、あるいはダ体とデアル体の混用が見られる場合、そこにどのような要因が関わるかについて考察したものであり、どのジャンルでどの文体が基調として用いられるかについての実証的な研究は乏しい。殊にダ体、デア

ル体に関しては、「ダ・デアル体」というように「常体」として一括りに扱われることもあり、これらが実際にどこでどのように用いられているか、明らかになっているとは言い難い。

2. 研究目的

本研究では、ダ体とデアル体の使用の実態とその背景にある史的変遷の一端を明らかにするために、研究対象として新聞の社説を取り上げ、そこで用いられる文体について考えたい。社説に着目したのは、冒頭に挙げた一般的な認識のように、文体の使い分けが話題になるときに一つのジャンル区分としてしばしば社説が取り上げられること、また社説は論説文の代表格とも言えるものであり、一般へ与える影響が大きいと考えたことによる。

進藤(1981)によると、当初、文語文で書かれていた新聞に口語文が登場するのは1902(明治35)年前後とされる³⁾。口語文は囲み記事や通信文から始まり、徐々に使用される範囲を広げていくが、新聞紙面の中でも社説は口語化が最も遅く、1919(大正8)年以降、少しずつデアル体の口語文で書かれたものが見られるようになるということである。

時代が下って昭和期の社説の文体について言及したものに大久保(1959)があ

る。大久保は、1957年から1958年の読売、朝日、毎日の3紙の社説の文末形式を分析した。大久保の分析は、ダ、デアルのみに注目したものではなく、現れる全ての形式、例えば、動詞の終止形や～テイルという形式、形容詞終止形等についてその数を集計したものであるが、その中から、ダとデアルを抜き出してみると、デアルのほうが圧倒的に多く、当時の新聞社説の文体はデアル体が主流であったことがわかる。

以上のことから、新聞社説の文体は、明治期に口語化されてから少なくとも大久保(1959)の調査の頃まで、デアル体が基調となっていたといえることができる。では、その後、現代に至るまで社説はどのような文体を採ってきたのだろうか。社説についてのより広義の文体分析(ダ、デアル等の形式に絞らない分析)は散見されるが、近年のダ体、デアル体の使用状況に絞った研究は管見の限りでは見あたらない。

そこで本研究では、現代における社説の文体とそこに至る過程を知るために、1940年代から現在までのダ体とデアル体の使用状況を調査することとした⁴⁾。

なお、本稿では、ダ体、デアル体という用語で、それぞれ終止形ダとその他の活用形、終止形デアルとその他の活用形⁵⁾を総称した文体を表し、個々の文に現れる言語形式をダ、ダロウ、デアル、デアロウ等と表すこととする。

3. 調査

3-1. 資料について

本研究では、大久保(1959)に倣い、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞の3紙の社

説を取り上げた。これら3紙は、2009年上半期で読売が約1千万部、朝日が約800万部、毎日が約330万部発行しており⁶⁾、全国紙のベストスリーを占めるもので、社説の文体として一般化するには適切であろうと思われる。調査にあたっては、1947年、1957年、1967年、1977年、1987年、1997年、2007年から、各紙についてランダムに10日分を選び⁷⁾、各年で延べ30日分を資料とした。

調査にあたっては、文末に出現するもののみを対象とし、ダ体はダ・ダロウ・ダッタ、デアル体はデアル・デアロウ・デアッタの形式をカウントした(ダロウカ、デアロウカは、それぞれダロウ、デアロウに含めて集計した⁸⁾)。従属節内のダ、デアル等を調査の対象としなかったのは、従属節内ではダとデアルが必ずしも文体上の対立をなさないことによる。例えば、「太郎が学生であるからには」、「太郎は学生であるものの」等といった従属節のデアルをダに変えることはできない。デ、デアリ、デアッテについても、「部下が怠惰で困る」のような文のデが通常、デアリ、デアッテで置き換えられることがないように、必ずしも文体だけの違いとは言えない。つまり文体の選択がそもそも行われなかったため、文体調査の対象とするのは適切ではないと考えた。また、文末であっても、デハアル、デモアル等、取り立て助詞を介入させる形式は除外した。取り立て助詞を用いようとするとデアル体を探るしかなく、そこに文体選択の余地はないからである。

3-2. 調査結果

3-2-1. ダ体とデアル体

まず、表 1-1 ～表 1-4 に 1947 年から 2007 年におけるダ体とデアル体の用例数と両者の比率を示す。表 1-1、表 1-2、表 1-3 は、それぞれ、読売新聞、朝日新聞

聞、毎日新聞の社説の文体の集計結果であり、表 1-4 はこれら 3 紙の合計である。また、図 1-1 ～図 1-4 に表 1-1 ～表 1-4 のダ体とデアル体の比率をグラフで示し

表 1-1 ダ体とデアル体(読売新聞)

年	ダ体		デアル体		計 用例数
	用例数	%	用例数	%	
1947	16	15.8	85	84.2	101
1957	18	18.4	80	81.6	98
1967	19	14.0	117	86.0	136
1977	36	27.5	95	72.5	131
1987	55	38.5	88	61.5	143
1997	83	80.6	20	19.4	103
2007	100	86.2	16	13.8	116

図 1-1 ダ体とデアル体(読売新聞)

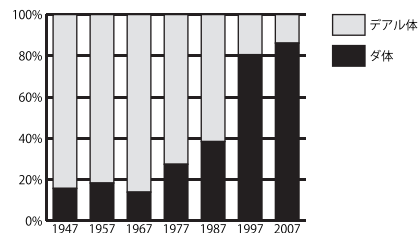


表 1-2 ダ体とデアル体(朝日新聞)

年	ダ体		デアル体		計 用例数
	用例数	%	用例数	%	
1947	3	2.7	109	97.3	112
1957	17	11.0	137	89.0	154
1967	31	16.7	155	83.3	186
1977	43	28.3	109	71.7	152
1987	71	52.2	65	47.8	136
1997	115	75.7	37	24.3	152
2007	121	85.2	21	14.8	142

図 1-2 ダ体とデアル体(朝日新聞)

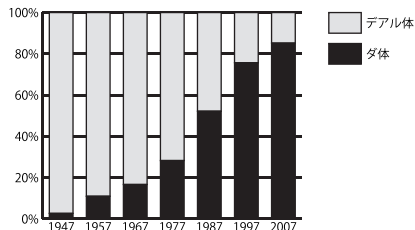


表 1-3 ダ体とデアル体(毎日新聞)

年	ダ体		デアル体		計 用例数
	用例数	%	用例数	%	
1947	5	4.6	103	95.4	108
1957	40	35.7	72	64.3	112
1967	8	5.2	145	94.8	153
1977	41	29.3	99	70.7	140
1987	66	41.3	94	58.7	160
1997	109	69.4	48	30.6	157
2007	111	85.4	19	14.6	130

図 1-3 ダ体とデアル体(毎日新聞)

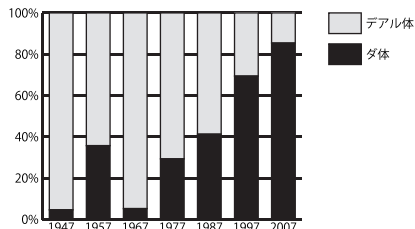
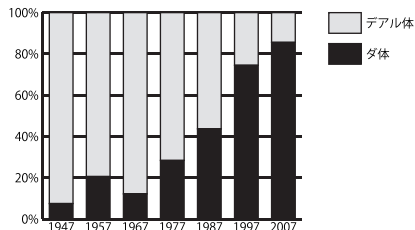


表 1-4 ダ体とデアル体(3 紙計)

年	ダ体		デアル体		計 用例数
	用例数	%	用例数	%	
1947	24	7.5	297	92.5	321
1957	75	20.6	289	79.4	364
1967	58	12.2	417	87.8	475
1977	120	28.4	303	71.6	423
1987	192	43.7	247	56.3	439
1997	307	74.5	105	25.5	412
2007	332	85.6	56	14.4	388

図 1-4 ダ体とデアル体(3 紙計)



た。

まず読売新聞を見ると、1947年から1967年にかけては、デアル体が8割以上を占めていたが、1977年、1987年とダ体が増加していき、1997年には一気にダ体が8割を占めるようになっていく。朝日新聞では、1947年にはデアル体が97.3%と、ほぼ全てと言ってよいほどの率であった。それが、1957年、1967年、1977年とダ体の率が上がり、1987年に半数以上になった。その後も、ダ体の使用が増え続け、2007年には85%以上がダ体という状況になっている。毎日新聞では、他の2紙と1957年の傾向が異なるが、基本的には、1967年まではデアル体が主体であったと言えるだろう。その後、1977年、1987年とダ体の使用が増え、1997年には約70%が、2007年には85%以上がダ体になっている。以上3紙を合計した全体の傾向としても、1947年から1967年まではデアル体が主流を占めたが、1977年以降、ダ体の使用が増え、1987年と1997年でダ体とデアル体の形勢が逆転し、2007年にはダ体がほとんどを占めるようになっていく。

3-2-2. ダロウ、ダッタとデアロウ、デアッタ

ダ体とデアル体の使用状況の集計を進める中で、ダ体のうちダロウ、ダッタの形式の増加が著しいこと、裏を返せばデアル体のうちデアロウ、デアッタの形式が目立って減少していることに気づいた。そこで、終止形であるダとデアル、推量のダロウとデアロウ、主に過去を表すダッタとデアッタについて、3紙の合

計でそれぞれの比率がどう変化しているかを集計し、次頁の表2-1、表2-2、表2-3に、それぞれダとデアル、ダロウとデアロウ、ダッタとデアッタの使用数と両者の比率を示した。図2-1、図2-2、図2-3はそれらの比率をグラフに表したものである。

ダとデアルの比率を前節で見た3紙合計のダ体とデアル体の比率と比べてみると、ダとデアルにおけるダの比率がダ体とデアル体におけるダ体の比率より若干低い。ダはダ体全体の変化と似た傾向を見せ、1977年以降、顕著に増加し、1997年には主流を占めるようになっていく。なお、ダの比率がダ体全体の比率よりも低いのは、下に述べるように、ダロウとダッタが大きく使用数を増やし、ダ体全体の比率を引き上げていることによる。

ダロウとデアロウ、ダッタとデアッタの比率を見てみると、ダ体とデアル体におけるダ体の増加よりも、ダロウおよびダッタの増加が著しい。ダロウは1977年にほぼ半数に達し、2007年にはデアロウの用例は1例に過ぎなくなる。ダッタについては、1977年の35%から1987年には約65%に増え、1997年以降、9割を超えている。

4. 考察

4-1. デアル体からダ体へ

調査結果から、新聞社説においては、戦後間もなくはデアル体が大勢を占めたが、その後、ダ体に移行し始め、1970年代ごろから急速にダ体が増えること、そして、現在はほとんどがダ体で書かれているということがわかった。社説の文

表 2-1 ダとデアル

年	ダ		デアル		計 用例数
	用例数	%	用例数	%	
1947	19	7.3	243	92.7	262
1957	56	18.5	247	81.5	303
1967	19	5.7	313	94.3	332
1977	59	20.1	234	79.9	293
1987	117	35.3	214	64.7	331
1997	217	68.9	98	31.1	315
2007	232	81.7	52	18.3	284

表 2-2 ダロウとデアロウ

年	ダロウ		デアロウ		計 用例数
	用例数	%	用例数	%	
1947	4	10.3	35	89.7	39
1957	17	33.3	34	66.7	51
1967	38	29.9	89	70.1	127
1977	54	49.1	56	50.9	110
1987	56	70.9	23	29.1	79
1997	66	91.7	6	8.3	72
2007	64	98.5	1	1.5	65

表 2-3 ダッタとデアッタ

年	ダッタ		デアッタ		計 用例数
	用例数	%	用例数	%	
1947	1	5.0	19	95.0	20
1957	2	20.0	8	80.0	10
1967	1	6.3	15	93.8	16
1977	7	35.0	13	65.0	20
1987	19	65.5	10	34.5	29
1997	24	96.0	1	4.0	25
2007	36	92.3	3	7.7	39

図 2-1 ダとデアル

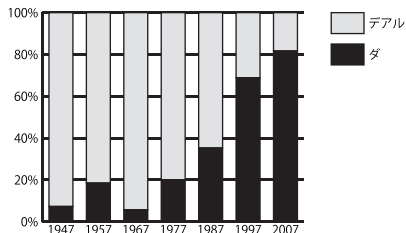


図 2-2 ダロウとデアロウ

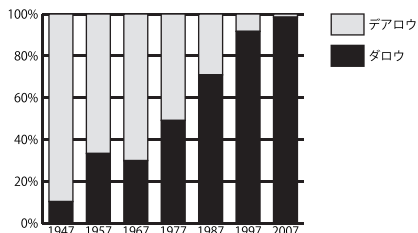
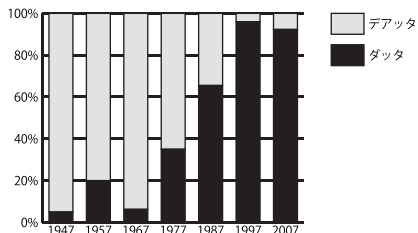


図 2-3 ダッタとデアッタ



体は、かつては、先に触れた日本語教育学会編(2005)や佐竹(1988)が述べるように、デアル体であったと言えるが、現在はダ体であると言ってよい。では、なぜこのように社説は初めデアル体を採用、後にダ体を主流とするように変化してきたのだろうか。

口語化された社説が長くデアル体を採用してきたことは、現代の書き言葉の成立過程とそこから来る各文体の性質から説明される。ダ体、デアル体、さらにデス・マス体といった現代の文体が明治の言文

一致運動を経て成立したことは周知の通りであるが、明治 30 年頃にはこれらのうちデアル体が最も優勢なものとなっている(田中(2002)、山本(1944)、中山(1986)等参照)。これは、ダ体がその出自を東国の話し言葉に持ち(山本(1960)、遠藤(2004)等参照)、それ故、話し言葉の持つ待遇性(この場合、ぞんざいさ)や情意的要素を感じさせるものであるのに対して⁹⁾、デアル体は蘭学者が翻訳のために創出したデアルからきたものであって(山本(1944)、杉本(1962)等参照)¹⁰⁾、

話し言葉とは切り離せない待遇性や情意性を持たず、書き言葉に適したものとして広く受け入れられたためと言われる(森岡(1985)、柳父(1982)参照)。デアル体の隆盛は、中山(1986)の言葉を借りると、文章界で「王座」(p.44)を占めていたというほどであり、学校という教育の場でも国定教科書においては、会話文にダ体を用いる一方で、地の文には徹底してデアル体を用いている(塩澤(1978)、大野他(2008)参照)。こうした流れを受けて、口語化された新聞社説もまたデアル体を選んだのは当然であると言える。

こうしてデアル体を選んだ社説の文体が、上述のように、ダ体へと移行してきたわけであるが、この変化の背景に何があるのかを考察するために、読売、朝日、毎日の各新聞社に、デアル体からダ体への文体の変化を指摘した上で見解を尋ねたところ、読売と朝日から以下のような回答が得られた¹¹⁾。

- ・読売：お尋ねの件ですが、申し訳ありませんが、当時を知る人物はいません。また、資料、記録などありません。こうしたご指摘は我々も気付いていませんでした。
- ・朝日：新聞社としての意見を表明する社説は、他の記事と同じですが常に読者に分かりやすく親しみやすい文章を目指しています。その様な中で、ご指摘のような変化があったのではないかと思います。

これらの回答から、少なくとも、変化は意識的なものというより無意識のうちに起こったものであるということ、また、紙面の分かりやすさを追求する中で文体が変化してきたということが示唆さ

れる。このうち、分かりやすさの追求というのは、各新聞が文字のサイズを大きくし、文字数を減らしてきたという動きとも連動するものである。分かりやすく親しみやすい文章を目指した結果、かつて話し言葉的な響きがないものとして選ばれたデアル体から、話し言葉をその出自に持つダ体が選ばれるようになったということは大変興味深い。

社説へのダ体の採用はまた、ダ体そのものが言文一致運動以来の時を経て、文章語として一定の格を確立してきたということでもあるだろう。新聞紙上において、社説はそれぞれの社としての見解を広く社会に知らしめる場であり、そこで用いられる文章にも重厚さや権威的なものが求められ、文体に関して保守的であると思われる。2節で、明治期に新聞記事に口語文が取り入れられたが、社説には大正期になってから口語文が登場したことに触れたが、このことについて山本(1964)が社説は「頑強に非言文一致の孤塁を固守して来た」(p.129)と述べていることから、社説の文章表現の保守性が窺える。また、野元(1978)によると、同じ新聞紙上でも記事においては、1965年には既にダ体がデアル体よりも優勢になっているが、社説では本稿で報告している通り、ダ体が主流となるのは1990年代で、記事より四半世紀以上の遅れがある。記事にはスペースの制約があり、少ない文字数で多くの情報を伝えるためにはダ体が有利であったということを考えても、ダ体採用時期のここまでの大きな開きは、社説の文章表現に対する保守性ゆえであると言えるだろう。

文体についてこのように保守的な社説

に採用されるということは、単にダ体が話し言葉由来の親しみやすさや分かりやすさを備えているというだけではなく、やはり書き言葉の文体としての成熟がそこにあると考えるべきだろう。田中(1999)が、新聞記事は早くからダ体を用いることによって、ダ体から「その卑俗さをぬぐい去り、一応の品格をそなえた簡潔な文体に育て上げてきた」(pp.289-290)と述べている通り、ダ体は長く記事に用いられているうちに、書き言葉の一つの形として定着し、広く用いられるようになってきたと言えるのではないだろうか。田中も指摘するように、今なお書き言葉としてはダ体よりもデアル体が適切であると感じる人もいるだろうが、ダ体が用いられる範囲を広げ、所謂「固い」書き言葉として認知される方向にあることは確かである。

4-2. ダロウ、ダッタの増加について

3-2-2で、ダロウ、ダッタがダ体全体に先んじて増加傾向を見せ始め、近年ではデアロウ、デアッタがほとんど見られないと言ってもよい状況であることを見た。本節ではこの点について考えたい。

まず、ダロウの増加であるが、これはダロウがダの活用形というよりも、モダリティ表現として確立していると言えることがその理由であろう。つまり、ダロウに関してはダ体であると認識されにくく、推量を表す独立したモダリティ表現としてデアル体が優勢であった頃から多数使用されているのではないだろうか。なお、これは言文一致体の確立期である明治30年代にも言えたことのように、中山(1986)は、明治30年代の社説、論説・

評論文、随筆・批評文等の文体を調査した結果、デアル体が圧倒的であるが、未来的表現に限ってはダロウが多く用いられると指摘している。

ダッタは、ダロウほどに早くから多用されてはいないが、ダよりは早く使用数の増加が見られる。これは、ダロウよりもダの活用形として認識されやすいものの、言い切りの形であるダほどには話し言葉的な響きが強くないからであろう。ダの形式が用いられる表現に、「嫌だ」、「嘘だ」といった感情等の表出、また「火事だ」、「雨だ」といった眼前描写の用法があるが、これは、その時、その場で発される言葉であり、したがって口頭表現で用いられるのが通常である。こうした用法を持つダに比して、ダッタは話し言葉としての印象が強くなく、ダよりも早く社説の中で取り入れられ始めたのではないだろうか。

社説においてダロウ、ダッタが増加し、デアロウ、デアッタが見られなくなってきたということは、デアル体が終止形デアルでの使用に限られつつあるということである。これは、デアル体の歴史から考えると注目すべき現象である。

デアルは、元来、中世にニテアリが変化して生じたものとされる。このデアルの終止形は、中世末にデア、ヂヤ、ダと変化し、近世になってからは、デアロウ、デアッタの用例は見られるものの、デアルという終止形は見られなくなったという(山本(1944)参照)。その後、上述のように蘭学者が直訳のための語としてデアルを用い始め、それが言文一致運動を経て、終止形をデアルとし、デアロウ、デアッタという活用形を持つ現在のデアル

体が成立したわけであるが、今、社説の調査結果に限って言えば、デアル体は専らデアルという終止形で用いられ、デアロウ、デアッタという形が使われなくなりつつあるのである。この動きがこの先どのように展開するのか、また社説以外のジャンルでも見られるのか、さらにこれがどのような意味を持つのかについては、将来の観察、研究を待たねばならないが、少なくとも何らかの変化の兆しがあると言えそうである。

5. おわりに

本稿では、社説の文体の変遷と現状を観察し、その結果、社説はかつてデアル体を基調としていたのが現在ではダ体で書かれるようになってきていること、さらにデアル体はデアルという終止形での使用に限られつつあることを見た。では、社説と同じく一般には常体を用いて書かれるとされるジャンル、例えば論文や事務的文書等の文体使用の実態はどうなっているだろうか。直感的には、論文や事務的文書ではデアル体が主流であるという印象があるが、ダロウ、ダッタも相当な割合で用いられているのではないかと思われる。社説以外の常体の文書について調査を行い、ダ体とデアル体の使用について、より詳細かつ包括的に記述することを次なる課題としたい。

注

- 1) 本研究は、2009 年日本語教育世界大会（於 豪州ニューサウスウェールズ大学）における口頭発表に、当日得られたコメント等をもとに考察を加えたものである。

- 2) 文体という用語は、「夏目漱石の文体」、「赤川次郎の文体」というように書き手によって異なる文章表現の特徴を指す場合や、「和文」、「漢文」、「和漢混淆文」の区別のように語彙や語法の体系による分類を指す場合等、様々な用法を持つが、ここではデス、ダ、デアル等の文末形式の選択によって示される文の特徴を指すものとする。

- 3) 明治初めに現れた小新聞（女性や子どもを主な読者対象とし、平易な文で市井の事件等を伝えた）には、初期の段階で談話体の文章が用いられていたが、文末形式としてデアリマス、ゴザリマス、ゲス等が混在し、言文一致運動を経て確立した口語文の文体とは様相を異にすること、また小新聞に談話体が用いられたのは4～5年間で、その後、文語文で書かれるようになったこと（進藤(1959)参照）から、本稿では小新聞の初期に見られた談話体を考慮の対象から外した。

- 4) 1957 年から 1958 年の社説を扱った大久保(1959)の調査と重なる時期があるが、大久保の調査は1年分で300センテンスを対象とした分析であり資料がやや少ないので、その追検証という意味も含めて、1940 年代からの調査とした。

- 5) いわゆる学校文法では、ダロウは断定の助動詞ダの未然形ダロに推量や意志、勧誘を表す助動詞ウが付いたもの、ダッタは連用形ダッに過去の助動詞タが付いたものとされるが、本稿では、ダロウ、ダッタの構成を問題にしないので、日本語教育の分野等で用いられる活用表に従い、ダロウ、ダッタを分

解せずダの活用形として扱う。デアルについてもその構成を問題にせず、デアルを断定を表す表現の終止形とし、デアロウ、デアツタもそれぞれ活用形の一つとする。

- 6)発行部数は、各社広告局ホームページによった。
- 7)10日分の抽出は以下の手順で行った。
 - ①1月1日から12月31日までに1から365まで通し番号をつける(調査対象とした年に閏年は含まれていない)。
 - ②1から365までの数値について、Excelを用いてランダムに重複しない10の数値を発生させる。
 - ③得られた数値に通し番号が該当する日付けの新聞を資料として用いる(休刊日にあたる場合は、翌日の新聞とした)。
- 8)今回の調査では、ダツタカ、デアルカ、デアツタカの形式の用例はなかった。
- 9)例えば、島村抱月は、ダ体を「獨斷的、すなはち横座辨慶の獨りで氣焰を吐く格に聞こえて、おもしろくない」と述べたという(山本(1944)、柳父(1982))。
- 10)中村(1963)は、デアルは近世においても漢学者等を中心として教養層に国字解、里言解用語として用いられており、蘭学者は翻訳に際してそれを借用したとの見解を示している。また、古田(1967)は、デアルの成立が九州方言にも支えられていた可能性を示唆している。いずれにしても、少なくとも一般の話言葉において、デアルが広く用いられていたとは言えない。
- 11)問い合わせは、各社ホームページを通じて行った。読売、朝日からの回答は、それぞれ読売新聞東京本社読者センター、朝日新聞社広報部から得られた。

参考文献

- 遠藤好英(2004)「ダ体の文章の系譜」『国語論究 11 言文一致運動』明治書院 pp.194-241
- 大久保愛(1959)「新聞社説の文章と小説の文章」国立国語研究所『ことばの研究 第1集』秀英出版 pp.45-56
- 大野早苗・川口良・角田史幸(2008)「書き言葉におけるスタイル確立過程に関する一考察—明治期国語教科書と児童・生徒作文の分析—」『日本語教育学世界大会 2008 予稿集 2』大韓日語日文学会 pp.32-38
- 佐竹和子(1978)「明治期の国定国語教科書—言文一致体の確定に果たした役割—」『上智大学国文論集』11 pp.117-160
- 塩澤和子(1978)「明治期の国定国語教科書—言文一致体の確定に果たした役割—」『上智大学国文論集』11 pp.117-160
- 進藤咲子(1959)「明治初期の小新聞にあらわれた談話体の文章」国立国語研究所『ことばの研究 第1集』秀英出版 pp.57-70
- 進藤咲子(1981)『明治時代語の研究—語彙と文章—』明治書院
- 杉本つとむ(1962)「近代後の標章—デアル体の発生と展開—」『国文学研究』第25集 早稲田大学国文学会 pp.282-290
- 田中章夫(1999)『日本語の位相と位相差』明治書院
- 田中章夫(2002)『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版
- 中村通夫(1963)「「である」小考」『中央大

学文学部紀要』29号 pp.119-160

中山史恵(1986)「明治三十年代における
文末表現の一考察—二大総合雑誌の口
語化—」『国文』64号 お茶の水女子大
学 pp.36-46

日本語教育学会編(2005)『新版 日本語教
育事典』大修館書店

野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみ
た文章・談話の構造」『国語学』194集
pp.89-102

野元菊男(1978)「話しことばに近づく新
聞文章」大石初太郎他著『ことばの昭和
史』朝日新聞社 pp.161-197

古田東朔(1967)「幕末・明治初期の翻訳
文等における「X+アル」」『国語と国文
学』44(4)pp.78-92

メイナード、K. 泉子(2004)『談話言語学
—日本語のディスコースを創造する構
成・レトリック・ストラテジーの研究
—』くろしお出版

森岡健二(1985)「言文一致体成立試論」
『国語と国文学』62(5) pp.78-92

柳父章(1982)「欧文翻訳と現代共通語文」
宮地裕他編『講座日本語学7 文体史
I』明治書院 pp.73-94

山本正秀(1944)「デアルの沿革」『橋本
博士還暦記念国語学論集』岩波書店
pp.505-524

山本正秀(1960)「言文一致文の文法」『講
座 解釈と文法 第7』明治書院 pp.245-
280

山本正秀(1964)「開化期の文体をめぐっ
て」森岡健二他編『講座 現代語2 現代
語の成立』明治書院 pp.102-130

(秀明大学)

◇表現研究関連文献紹介

小野正弘『オノマトペがあるから日本語
は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』
(平凡社、平成21年7月刊、¥720)

「シュボッ」。ゴルゴ13がライターを
点火する音である。初めからそうであっ
たわけではなく、「チャッ」、「シュバッ」
を経て「シュボッ」に至ることを、シリ
ーズ第35巻まで精査して、確認する(第2
章)。著者のオノマトペに対する(ゴルゴ
13に対する?)愛着のほどがわかる。オ
ノマトペへの愛情が書かせた1冊と言え
そうである。

本書は、オノマトペの体系的説明を目
的としない。著者自身が第5章末尾で述
べるように、オノマトペの生態を観察し、
そして楽しむことが目的である。けれど
も、娯楽をのみ求めた本でもない。

例えば、第1章では、オノマトペの語
尾を「ッ」・「リ」・「ン」に分け、その働き
の違いを説明する(詳しくは、小野正弘
編『日本語オノマトペ辞典』小学館刊、「オ
ノマトペのたのしみ」参照のこと)。第3
章では、東海林さだお氏の評言に触発さ
れて、「食べるオノマトペ、マイナス逆
転仮説」を提示する。そして、第5章では、
本書の章中もっとも多くの紙数を割い
て、上代から近世に至る、国語表現史に
おけるオノマトペの位置づけを行なう。
著者の真骨頂が発揮された章である。こ
れらの章は、若い読者に、国語研究、わ
けても国語史研究への興味を掻き立てさ
せるはずである。

とは言え、肩肘張って読む本ではない。
随所に著者の遊びがある。そこにニヤニ
ヤしながら、ガッツリ読んでほしい。(著
者は非会員。) (長沼英二)